

2025「ことばの森教室」 優秀作品紹介

<中学校1年生> 作文課題「学園祭から学んだこと」

1-①

「努力はいつかきっと報われる」

「劇で王子様をやる人。」と言われた時、迷うことなく手を上げた。その時は、劇の役決めだった。自分しか手を上げていなかつたので、主人公の役をすることになった。やるのは「星の王子様」だった。

いざ練習を始めてみると、それは決して楽なものではなかった。多いセリフや長いセリフ、ジェスチャーなど、それほどでも過酷なものだった。遅い時間までセリフを頭に入れたりした。その中では絶対失敗してはいけないという責任感がとても強かつたと思う。だからこそ真剣に取り組めたのかもしれない。それからも地道な努力を続けていき、リハーサルでもある程度の間違いがあったが、そのちょっとした間違いも次に間違えないようにした。

そして、本番。いつも通りに、そして楽しみながら挑んだ。そして、一番良い「王子様」を演じることができた。やはり、努力はいつかきっと報われると思える瞬間だった。

1-②

「リーダーとしての役目って？」

文化部門の担当になつた。初めての学園祭。分からぬことだらけで、楽しみな気持ちもあつたけど、正直不安でいっぱいだった。

私は文化部門はじめの言葉をすることになった。人前に立って、何かしゃべることは苦手なので緊張した。しかし、流れの確認ばっかりで、全部はじめの言葉を言うことができる時は、1回しかなかつた。本番で、大きな声でかまないで言うことができるのか不安だった。だけど、先輩達が1年生を引っ張ってくれて、安心する言葉をかけてくれた。そして、本番は大きな問題なく、やり切ることができた。

6年生の時に委員長になつたりしたけれど、緊張している子に安心させてあげられる言葉なんて、かけてあげられなかつた。同じチームとして、リーダーは引っ張っていくだけではなく、声をかけていくことが大切だということを学んだ。私はこの先、この体験を大切にしていきたい。

1-③

「みんなでつかんだ成功」

初めての学園祭では、みんなで協力することの大切さを学んだ。

私の学年は、劇を発表したが、準備の始めは上手くいかなかつた。意見が合わなかつたり、時間が足りなかつたりして、大変だった。セリフを覚えるのも、動きを合わせるのも難しかつた。しかし、みんなで話し合いながら、何度も練習を重ねていく内に、段々まとまりが出てきた。本番の日はとても緊張したが、お客様の笑顔や拍手を見て、今までの頑張りが報われた気がした。劇が終わった時の達成感は忘れられない。

この経験を通して、何かを成功させるには、一人だけでなく、みんなの力を合わせることが大切だと感じた。これからも、学園祭で学んだチームワークを大切にして、学校生活でも協力しながら、頑張っていきたいと思う。そして、みんなと力を合わせれば、どんなことでも乗り越えていけると信じている。

<中学校2年生> 作文課題「『過ちては改むるに憚ること勿れ』から考えたこと」

2-①

「本当の失敗」

「ここは失敗してもいいところなんだから、どんどん失敗しなさい。そして学びなさい。」と話してくれたのを思い出した。

過ちては改むるに憚ること勿れ。この言葉を聞いて真っ先に出てきたのが、クラブチームの先生の言葉だ。

失敗を恐れるのが人間の本能なのか。けれど、一日を過ごす上で失敗をしなかった日なんてない。失敗するのは、人の常。それでも成功にこだわる。この故事成語では、失敗したことを改めないことこそが失敗だと言う。私が考えたのは、失敗したことを改める。これほどの成功への近道はないということ。ヤケクソに挑戦すればいいというわけではない。

本当の成功とは、失敗とは、挑戦とは。この故事成語が核心を突く答えではないのか。失敗だって、考え方一つでは失敗ではなくなる。挑戦できる環境があるというのは、そこが失敗から学び、成長するための環境なのではないか、と私は考えた。

<中学校3年生> 作文課題「寓話『すっぱいぶどう』から学べること」

3-①

「悔しさを力に」

自分なりに努力してみたものの成果が出なかった時に、悔しい気持ちをどう消化するのかということを、すっぱいぶどうは教えてくれている。一度あらすじを読むと、ただ負け惜しみを言つていて、言い訳をしているようにしか感じなかつた。しかしそれとは反対に、うまくいかなかつたことをよくよ考えずに、気持ちを切り替えればいいのだという風にも捉えることができた。

自分自身、なりたいものになれなかつた時にくよくよしてしまい、前に進めなかつた時があり、立ち止まってしまったことがある。気持ちを切り替えることの難しさを経験した。叶わなかつたことに対して逃げるのではなく、次にどうすればいいのか考えることが大事なのだ。マイナスな気持ちを引きずらないように、人それぞれ消化方法が違うけれども、自分なりの消化方法を見つけることができれば、困難なことがあっても工夫して頑張ることができるのではないか。

3-②

「失敗を認められない私」

イソップ寓話の「酸っぱいブドウ」は、達成できなかつた目標を価値のないものと決めつけ、自分を正当化する人間の弱さを体験した。3年間の努力の末、私はレギュラーの座を後輩に譲ることになった。悔しい気持ちよりも先に、自分の失敗を認めたくないという感情が湧いた。私は無意識のうちに、レギュラーという目標 자체を無意味なものだと決めつけた。「スタメンは責任が重いだけで面倒だ」「本当にチームに必要なのは目立たない守備だ」と、懸命に自分を納得させた。それは、自分の能力不足を棚に上げ、成功の価値を否定することで逃げる行為だった。この自己正当化こそが、「酸っぱいブドウ」の教訓だと気づいた。この経験から、目標達成を逃した現実を認め、悔しさを次の成長のエネルギーに変えることの大切さを学んだ。

3-③

「最後まで全力で」

「届かないからといって、最後まで頑張らない理由にはならない」と、祖父は言っていた。その言葉を、今でも思い出す。

母は、陸上ではかなり強い選手であった。そんな母の影響で、母の地元にある陸上のクラブチームに参加して練習した。得意とする種目は、母と同じで短距離走だった。練習についていけるようになった頃、クラブ内の短距離走では、常に上位をキープできるまでに成長した。初めて「優勝」を目指んだ大会は、優勝からはほど遠いひどい結果で終わつた。それからは、練習に積極的になれず、自分の心の中に「どうせ頑張ってもどこかで負ける」という思いが生まれた。そんな中での祖父のあの言葉は、当時の私の心に大きく響いた。そして今でも、苦しい時期にその言葉を思い出す。

目標を達成できない悔しさから、「どうせ無理だ」と諦めずに、自分が出せる全力で、最後まで頑張ることが大切だと思った。

3-④

「後悔の方向性」

「頑張ったところで、目標が達成できないなら意味ないよ」そう思っていた自分の考えが大きく変わったのは、イソップ物語「すっぱいぶどう」を読んだ時だった。

この話は、キツネが木の上のぶどうを取ろうとしても届かず、「どうせあのぶどうはすっぱい」と言って諦めるという内容である。私にも同じ様なことがあった。テストでよい点が取れなかつた時に、「勉強してなかつただけだし」と言い訳したことがある。キツネのように、自分ができなかつた理由を正当化していたのだ。この話を通じて、失敗を言い訳にせず努力を続けることが大切だと感じた。

一つの話しから、人生における重要なことを学ぶことができた。それと同時に、努力は報われるという言葉が頭をよぎる。そして私は、一つの答えにたどり着くことができた。それは、「やらなかつた後悔の方が大きい」ということだ。

3-⑤

「挑戦」

何事も「やってみないと分からぬ」と思う。今年、学園祭の部門別のステージバックの部門長になった。最初は人前に立つことが苦手で、私なんかにできるわけがないと思っていた。だが、実際に話してみたりすると、段々緊張も少くなり、とても楽しかった。

いよいよ学園祭当日、ステージバック紹介の時、部門長として保護者や生徒のみんなの前に出てマイクを持ち、ステージバックの紹介をした。前日の練習では、緊張して手が震え声も小さかつたけれど、当日は今まで以上にいい紹介ができた。紹介が終わつた後も達成感が強く、あの時挑戦して良かったなと思った。

このような経験から、自分にはできないと決めつけるのではなく、少しでもやってみようと思ったら挑戦することはいいなと実感することができた。これだけで、自分の成長にも繋がることができたし、とてもいい経験になった。これからも、迷つたら挑戦する気持ちを大切にしていきたい。

3-⑥

「自分の弱み」

酸っぱいぶどうと聞いて、私はイソップ物語の「酸っぱいぶどう」を思い出す。そこで人の心の弱さについて考えた。この話では、キツネが高い木にあって届かないブドウを、「どうせ酸っぱい」と、本当は欲しかつたが悔しさをごまかすため悪く言い、自分を納得させている。

私も似たような経験がある。テストでよい点を取れなかつた時、「今回は本気じゃなかつたし」と口にしてしまつた。本当はとても悔しかつたけれど、負けた自分を認めたくないという気持ちから、そういう発言をした。

この話を通じて感じたのは、自分の弱さから目をそらすことの大切さだ。うまくいかないことを言い訳にするよりも、正直に悔しさを受け止め、次にどうがんばるかを考える方が、自らの成長に繋がると思う。これからは「酸っぱいぶどう」と言い訳せず、届かなかつた理由を見つめて、一步ずつ近づいていける自分でありたい。

3-⑦

「『すっぱいぶどう』から学べること」

この話から私は、人の心の弱さと考え方の大切さについて学びました。話の中で、キツネは木の上になつてあるブドウを取ろうと一生懸命にジャンプしますが、どうしても届きません。するとキツネは「どうせあのぶどうは酸っぱいに決まつてゐる」と言って、立ち去ります。この時私は、キツネの言葉が自分への言い訳のように感じました。

私達もうまくいかないことや努力しても手に入らないものがある時、「どうせ自分には関係ない」「最初から興味なか

った」と思ってしまうことがあります。でもそれは悔しい気持ちを隠すための言葉だと思います。キツネのように諦めて言い訳をしてしまうと、成長するチャンスがなくなってしまうかもしれません。

この話を通して、できなかつたことを言い訳で終わらせないことが大切だと思いました。このキツネのようにならず、努力を続ける自分でいたいなと思いました。